

## 2022 年度 北海道雪氷賞

### 「北の風花賞」

波多 俊太郎 氏（北海道大学低温科学研究所）

論文名： 「利尻島ヤムナイ沢雪渓における 2021 年現地調査報告」

選考理由： 雪渓研究は雪氷変態、氷河の遷移体、気候変動の指標、水収支の理解等の上で重要な分野となります。本論文は、日本の北端に位置する利尻島の多年性雪渓であるヤムナイ沢雪渓を調査した研究になります。ヤムナイ雪渓に関する調査例は少なく、基礎的なデータも不足しています。本論文における雪渓の表面状態（土砂被覆等）、融解量、標高変化に基づいた雪渓の流動や質量収支に関する測定結果は、多年性雪渓なのか氷河なのかを判断するためには必須の情報であり、雪氷学や気候学にとって重要な基礎的なデータとなります。まだ観測年や調査項目が少ない結果ではありますが、調査対象として斬新であり、今後の発展が期待されることから、「北の風花賞」受賞論文として選考されました。

### 「北の六華賞」

日本雪氷学会北海道支部 雪氷災害調査チーム（2022・札幌大雪）

論文名： 「2021-2022 年冬期の札幌都市圏における大雪について」

選考理由： 雪氷災害調査チームは、2007 年に本支部会の社会貢献事業の一環として創設されました。雪氷災害調査のみならず災害の回避、被害の軽減対策に資する情報を公平中立な立場から発信し、社会に貢献することを責務とした団体です。そのため、社会的影響の大きな雪氷災害発生時には、調査チームを現場に派遣してその実態を調査することも重要な役割となっています。雪氷災害調査チームの活動はこれまで雪崩災害防止に関連するものが多く、雪崩に関する一連の調査報告に対して 2020 年度にも「北の六華賞」を受賞していますが、本誌に投稿された一連の論文は、2022 年 1～2 月の札幌都市圏における大雪に関する調査報告であり、新たなメンバーも加わり、降雪、気象、積雪等の科学的な分野だけでなく、高速道路状況、救急搬送、屋根雪等の生活に関わる分野まで、幅広く調査・分析を行っています。そのすみやかな結果公表と論文発表、及び社会への注意喚起など、雪氷災害調査チーム（2022・札幌大雪）の活躍は特筆されるものと考えられます。したがって、雪氷学の発展だけでなく雪氷災害や寒冷地における生活に関する社会貢献に顕著な役割を果たす研究と認め、「北の六華賞」の受賞論文と

して選考されました。

曾根 敏雄 氏（北海道大学低温科学研究所）

論文名： 「北海道置戸町鹿ノ子ダム左岸の風穴地における地温変化」

選考理由： 近年の観測結果から、日本の永久凍土は山岳寒冷地の限られた地点でしか確認されていない状況です。越年性凍土の長年にわたる国内の越年性凍土に関する研究や地温変化の観測データは、凍土研究だけでなく、過去の日本の気候変動を評価し、今後について予測する上で非常に貴重な情報であり、これを継続的に行われてきたことを評価すべきであると判断しました。これまでの調査の成果を含め、北海道の雪氷研究に貢献する論文として、「北の蛍雪賞」の受賞論文として選考されました。

#### 「北の蛍雪賞」

高橋 修平 氏（北海道立オホーツク流氷科学センター所長、北見工業大学名誉教授）

受賞名： 雪氷学や雪氷防災研究の発展ならびに支部活動や社会への貢献

受賞理由： 高橋修平氏は氷河・氷床研究の著名な研究者であるだけでなく、寒冷地雪氷災害や路面凍結、吹雪、雪氷の冷熱利用等の幅広い範囲分野でご活躍され、雪氷学や防災の研究の発展に貢献されてきました。北見工業大学在職時は、日本雪氷学会北海道支部の研究発表会において上記の研究成果について継続的にご発表され、北見工業大学をご退職後もオホーツク流氷科学センター所長として雪氷研究の普及活動等の社会貢献を続けられております。2010年～2012年までは北海道支部長、2015年～2018年までは雪氷学会本部の会長職も務められ、2019～2021年度までは監事として北海道支部の運営に携われるなど、長きに渡って日本雪氷学会ならびに北海道支部の発展に重要な役割を果たされています。以上のことから、高橋氏に「北の蛍雪賞」を贈呈致します。

以上